

ぺんぺん草

花束にして



すずはら なずな

## うちの猫のはなし

---

ほとんど 鳴かない 猫だった。  
ずっと そんなものだろうと 思っていた。

小さな毛玉だった頃から 3年経て やっと  
「ご飯？」  
「ご飯 欲しいの？」  
何度も聞いて じらすと

「なおーん」  
短く やっと 声を出す。

トイレ 終わったよ・・・と  
やはり 短く 「みゃあ」と鳴く。

聞こえても 聞こえなくても  
応えてやっても やらなくても。

それにしても 外の猫たちは よく鳴くのだ。  
母猫が呼び 子猫が答え  
通りかかった 人に甘え  
えさをねだり  
テリトリーを誇示し  
敵を威嚇し・・・  
たくましく 甘え上手な 外の猫たち。

鳴かない猫は  
網戸を隔てた窓の外の 小さな小鳥を相手に  
くるくるきゅるる と  
のどを鳴らす。

暖かい部屋で おなかを減らす心配もなく  
守られて 退屈の意味も知らず  
鳴かないまま 猫は 生きてきた。  
ねえ、キミ 幸せ？

すりりと わたしの足の間を通り抜け  
エサの皿の前に ちゃんと座ったまま  
そろそろ 時間だよ・・・と 見上げるキミ

「ご飯？」

「欲しいの？」

「欲しいの？」

何回も聞いてみる。

「みゃあうーん」

言葉は大事。

そう 気持ち伝える言葉は 大事なんだよ

## せんせいさよならまた明日

---

せんせいをやってらしたご婦人がいた。  
私の仕事の ご相談承り窓口  
ある日やって来られて

ねえねえ 信じられない。  
いいことがあったの。

まるでぱあっと花が咲いたみたいに そのひとの周りが 華やいだ。  
幸せな空気。

バスに乗ってたの。  
「〇〇先生ですよね」って声かけられた。

解らなかったわよ、最初はね。  
だって オジサンよ、すっかりオジサン。  
でもね 男の子連れてたその人が 言うの。  
「先生の教えてくれた 手遊び まだ覚えてます。  
この子が小さいとき よく 遊びました。ほら こうして」  
バスの中、テレル息子さんと手遊びするの。

そのうちね、周りから拍手が起きた。  
もう びっくりでしょ。

恥ずかしいやら 嬉しいやら。

ああ、生きてて良かったって ほんと そう思ったの。

---

あれから 少し お会いする機会がなくなって  
久しぶりにお顔を見たときは 困りごとの相談だった。  
電気が切れたのかしら？ ここ見て下さる？  
でも そこは 玄関ドアのただの覗き穴で・・・。  
大丈夫 大丈夫 と安心させて 別れた。

その後 遠くに引っ越されたという。

どこかでお元気にされているだろうか。

あれから また 幸せに笑えるようなことが たくさんあっただろうか。

## さよなら きりん

---

大きなきりんのぬいぐるみが欲しい、と思ったのは私だったか、まだ幼かった頃の長女だったか。うちについこの間まで、そのきりんはいた。

長女が それにまたがって、ゆらゆら揺らすと今は亡き二女が クツクツとのどを鳴らす。あまり感情を表さないおとなしい赤ちゃんだったので、笑った笑ったと私も、長女も喜んで、更に大きくゆさゆさ揺らした。

赤い蝶ネクタイの 黄色いきりん。  
黒い丸い目。  
あんまり ゆさゆさやったので、足のところ綿が寄り、皺が出来、ちゃんと立たなくなってしまった。

長女がまた一人っ子になり、その後生まれた三女は、びっくりする程 元気者の（乱暴者とも言う）幼児に育った。  
きりんは更に激しい扱いを受ける。  
子守きりんはあちこち傷を作り綻びながら、それでも、付き合って頑張ってくれた。

男の子ばかりの家は ここまでぬいぐるみがない、ということを知ったのは末っ子長男の幼稚園友達が沢山家に来るようになってからだ。  
一人っ子の男の子と 男兄弟しかいない子が 競ってぬいぐるみを抱きたがった。  
中でも きりんは人気者だった。

もうぬいぐるみと寝るのはやめる。  
息子がそう言い出したのは 6年生になった時のこと。

子守きりんは彼のベッドの中において(他にも沢山ベッド周りにいた)ツノの取れた頭には ニットキャップを被らされていた。  
何度も何度も 破れを縫ったが、最後はもう諦めてツノを取ったのだった。

かわいそうに思いはじめると、もう ぬいぐるみなんか捨てられない。だけど、息子の成長宣言。  
何度も、何度も もう「さよならしよう」って言ったのにそのたび、かわいそうだからと、繕うことを望んだ彼。

ありがとうね、きりん。ありがとうね、息子。

うちの子どもたちの成長を見守った、子守のきりん。  
こうして 息子の成長宣言をもって役割を全うし、  
ついに 今年の4月昇天した。

ありがとうね、ぼろぼろのきりん。

まだ、ダイヤルの電話だったね。  
そうそう、親が出るというのが 多かった。

それでも、いつも誰かが コクハクの電話をかける計画なんかしてて  
—どうしよう どうしよう・・  
—がんばって見たら?案外うまくいったりして・・  
なんて言いながら、他愛なく盛り上がったりしていた。

私のクラスは 6年生の中でも、ませていると言われていた。  
2年ずつの組替えで、担任の先生も持ち上がりだったので、  
グループもあるにはあったが、男女共 皆 わりと仲が良かった。  
ちょこちょこカップルができたり、小学生なりに付きあったり別れたりなんてことも あった  
。

「もしもし わたし リカ」  
あの人形のキャラクターとおしゃべりできる、「リカちゃん電話」というのも流行ったが  
今回はその話じゃない。

「もしもし Mです。好きです」  
後ろでクスクス笑う雰囲気は どうしても伝わる。  
男子が女子に、他の男子の名を騙って 電話する  
遊び・・遊びなんだ。  
それが 流行った。  
使われた名前の男子、「M」君は、別に嫌われ者というわけじゃあないが、  
一人でも気が向いたら女子の家にあそぼ、と言って行ける  
小柄で気さくな、可愛らしい顔をした少年だった。  
気が合えば女子でも男子でも構わず遊べる、  
だから時には男子の遊び仲間から離れていることもあったかもしれない。

そんな電話があちこちの女子の家にかかり  
さすがに先生にばれて、反省会となった。

「電話がかかってきた女子は誰と誰？」

先生が「立って」、と促す。

いたずらした男子グループは、バツ悪そうな顔をしてもじもじしている。

数人の女子が立った。 私もしぶしぶ立った。

「何て言われたの？」

さらに先生が聞く。

「Mです、好きです って言って 笑いました」

「Mです 付き合ってくれって 言われました」

それぞれが言う。

私の番がきた。

言えなかったんだな。どうしても言いたくなかった。

「よく覚えてません・・・」

「同じようなこと言われたの？」

先生が聞く。

「・・・はい」

どういうわけだか、私の時だけなのか

M君でなくて N君の名が騙られたのだった。

N君は人気があって 親友のTちゃんと今とてもいい雰囲気

私が Tちゃんを応援し 他の子の悩み相談なんか受けながら

全然興味ないふりしながら

ひそかに もっと仲良くなれたらいいな、なんて思っていた子だ。

もちろん声を聞いて、それがN君だなんて思ったわけじゃない。

どきっとなんか したわけじゃない。

どうして 私だけ それが「N君」なんだ。

恥ずかしくて、なんだか情けなくて

もう どうでもいいから 早く 座りたかった。

そんなこと、言った子たちにとっては 大した意味なんかなかったのかもしれない。

きっともう、みんな忘れてる。

M君だって、覚えてないかもしれない。  
先生も きっと 忘れてるだろう。

そんな、いたずら電話の話、ちょっと思い出しただけ。

## 吾輩は「ママさん」ではない

---

もう寝よう・・・と思って2階に上がったのに  
下からダンナが呼ぶ。

そんなに広い家ではないから 小声で呼んでも聞こえるんだけど。

「おーい、ママさん」

このところずっと「ママさん」だ。名前で呼ばれたのは もう大昔。

さて。

呼ばれるといつも 身構えるのは 子どもの頃からの習性で。

「M!M (本名) ちょっと。」

母が 私を呼び捨てで呼ぶと、また 何かしでかしたかなあ・・・とまず思う。

それと 同じで、ダンナが呼んでも、まず

お湯沸かしっぱなしだっけ？ 何かまずいことしたっけ・・・

頭に浮かぶのは まずそれ。(自分の行動に自信がない)

何の小言？とイヤイヤ降りていく。

「ほら、見てみ、ヤマトそっくりだから」

ヤマトはうちの黒猫である。

「吾輩は猫である」

ケーブルで古い映画をやっている。

描写にはたしか 何色の猫と書いてないと、誰かが言った気がする。

(違ってたらごめんなさい)

映画では黒猫で、同じようなしっぽ、同じ色の目。

黒猫はたいてい これが多いんだけどね。

何だ、そんなことで 呼んだの。

と・・・思ったけど、少し映画と一緒に見て

先に寝た。

しっかり通して読んだことはないのだけれど  
有名すぎる冒頭と、変なあだ名の仲間などと珍妙なやりとりがある  
モノカキ先生の話だよな・・・と朝起きて、ダンナと話し、  
「猫じゃ猫じゃ、踊ってみろ。。っていうの知ってるよ、猫、踊ってた？」と聞くと  
ダンナ、ちょっと神妙になって  
「ビール飲ませたら酔っ払って、踊ってな、  
水飲もうとして、風呂でおぼれて死んじゃった」

えええ・・・  
そんなラストだったんですか？  
猫じゃ 猫じゃ は 死ぬ前なんですかあ・・・

ちょっと 気になった。  
読みたいような、読みたくないような・・・。

## 集会所

---

そこは この間 祝いの場で  
こんど そこは 弔いの場になります。

普段は何にもなくて  
来る人も限られていて  
事務的な ごくごく事務的な場であり

親しみの笑顔を来る人に向け  
それでも あるラインまでの親しみで  
それこそ ガラスの窓一枚隔てた親しみで。

年末があって  
年始があって

喜びがあって  
悲しみがあって

生まれてくるひと  
逝ってしまうひと

通り過ぎたひとたちの  
影がゆらめく場でもあり

残された冷蔵庫や置き忘れたまま引き受けた扇風機が  
この場所で、新たな役目を担いながら  
こっそりと 過去を語り続けていたりする。

## あいあいがさ

---

車で買い物に行く。

ぱらりぱらり降りだした雨だけど

まあ いいや。

濡れたまま、ダンナの出す車に乗り スーパーへ。

何でかさ持ってこなかったの？

車に置き傘あるんでしょ、一本で十分。

なんなら、スーパーの入り口で降ろしてよ。

じゃ、買い物ひとりでして来るの？車で待ってていいの？

あいにく立体駐車場 屋根のない最上階しか開いておらず。

車のトランク常備傘。

古だぬき夫婦の相合傘。

はみ出るぞ。

太ったぞ。

可愛げ無いぞ。

恋愛期間は はるか遠く

ときめきなんて どっか行って

家族 空気 ええと、戦友。

でもさ、時々 ときどき ときどきだけど

前を歩く その手を

ちょっと繋いでなんか みたいと思う。

恥ずかしがる顔 からかいながら。

あいあいあいあい

あいあいがさ。

うふうふうへへ。

何だよ、気持ち悪。

いいじゃん いいじゃん

うふうふうへへ。

あと一年で〇〇周年の

古ダヌキ夫婦のお話です。

## 土に還る

---

ずっと書きたかったことで　ずっとどう書くか迷ってたこと。

2つのシーン。どっちが先だったのか　どれくらい　間のあることかも定かでない。

1つ目は　図書館のボランティアしてた頃。  
わいわい　しゃべりながら　小学校の門を出ようとして  
ひとりが　立ち止まり  
銀色の郵便受けの上に　手を伸ばした。

彼女が　そっとつまみあげたのは  
ばっただったか　カマキリだったか。  
もう死んでいて動かない。

その後彼女は　その命のなくなった虫の身体を  
脇の　植え込みの草の下にそっと下ろした。

「土に還してやらないとね」

そう　言った。

もうひとつは　私。  
仕事場近くのアスファルトの道を　自転車で通る時  
蝶が道に留まっているのを見た。  
片方の翅が不自然に開いて　道に貼りついているみたいに見えた。  
時々ふるえるように　見えるのは　風のせいかもしれない。

自転車を降りようか　迷いながら  
ただ　留まっているだけでありますように  
車が来たりする前に　飛んでいきますように  
そう思いつつ　先へ急いだ。

用事を済ませ　帰りにもう一度そこを通る。

蝶は　どこかに飛んで行っただろう。  
そう　思い　そう願っていた。

けれど

さらに 両の翅をべったりと開き

蝶は もう風にも揺れなくなっていた。

ごめん。

ごめんね。

翅を傷めても なお生きてたかもしれない命。

あるいはもうあの時生きていなくても もっと早く 移してやるべきだった身体。

自転車降りて 傍の植え込みの土に

剥ぐようにして 蝶を還した

## もうひとつの相合傘

---

途中で雨が降ってきた。

せっかく満開だった桜を散らして 風もすいぶんつめたい。  
バス降り、急な坂を下っての 実家への帰り道。

カートを引いて ステッキをつき 歩く父の横で  
いつもなら 多少ぬれても にわか雨なんか気にせず歩く私も

そうか 風邪ひくのさえ 命にかかわるかもしれないくらい  
いたわらねばならない身体に 父は  
なっているのだと 実感する。

信号を見ながら めいっばいゆっくり 横断歩道を渡り  
その先にある ドラッグストアに  
ビニールがさを買いに入る。

急な雨にここぞとばかり ビニールがさを並べる街中の店と違い  
実にのんびりしたもので

「かさってあったっけ・・・」と  
カウンターの男性は ほかの従業員を呼ぶ。

棚の下から「一本だけありました」と出してくれたそのかさは  
明るいピンクの柄のついた これまた大きなピンク色のドットのついた ビニールがさだ。

「ずいぶんかわいいんですけど・・・」と差し出され  
「ほんと、かわいいですね」 探してくれてありがとう、と受け取って  
お勘定を済まし ドラッグストアを出る。  
(かわいくても 私、全然かまわないんだけど、と思いつつ)

父をぬらさぬように かさを斜めにさし掛けながら  
急な長い下り坂を ゆっくりゆっくり、ゆっくりと  
ひとつのかさで 父娘で歩く。

## いいなと思った

---

読み聞かせのメンバーで集まって 他愛のないおしゃべり。

以前、読み終えたすぐ後で、『その本面白かったから借りたいけど、すぐに借りられる?』って

参加した子どもに聞かれたよという一人の話に、

すぐに反応あるのって嬉しいよね。

面白かったって言ってもらえると 張り合いあるよね、って  
うんうん、皆頷いた。

ぼそっ。

端に座ってた美術監督の彼女が言う。

「あたしは、そういう時、借りようとせず、黙って待ってる子だったなあ」

うん?皆が振り向く。

「いい本だから皆がどうせ借りたいがるでしょ、

今言ってもなかなか回ってこないだろうから 皆が借りなくなってから借りよう、って 黙って  
考える、

そんなひねくれた子だったからね」

自嘲的、というのではなく。あくまで淡々と。

流行り物は あえてスルー。

興味あっても心の中に秘め。

自分のペースで近づいて。

ああ、アタシもそういう子だったよ。

人気の男子のこと絶対好きだっていわなかった。

アイドルなんか興味ないわ、って顔をした。

あ、でもそこが 今書きたいのではない。

否定して 雰囲気が悪くするでもなく、  
でも 皆が頷くところで 自分の違うところをさらりと言って  
ふわんと話題を広げる。  
ああ、そういうのもいいな。

アタシもそういう「ひねくれた子」好きだよ。  
そういう「ひねくれた子」で いたいよ。  
と 思ったのだった。

## たんぼの横の道

---

すり足で歩くおじいさんがいる。

シバ犬系の雑種を連れている。

本当におぼつかない足取りで

それでも 犬連れの散歩を楽しんでいるのか

それとも 犬を散歩させているのか。

犬も おじいさんの足取りに合わせ

ほとんど足踏み状態で

犬もそこそこ年寄りなんだろうが

けして 走ったり引っ張ったりはしない。

観ていて

微笑ましいとか 切ないとか

そんな風じゃなく

あ、あのふたりだよ。

と、そのまんまで

そのまんま。

暖かった頃も

暑い日も

涼しくなってきたこのごろも

きっとこれからの寒い日も

何曜日とかでもなく

時々見かけるのだ。

それは大抵 後ろからで

私、自転車だから

少し 速度緩めて

ゆっくり抜いていく。

その間 犬とおじいさんは  
よけるでもなく  
止まるわけでもなく

すりあしと足踏みで  
そこに いるのだった。

## 昔 住んだ 部屋（100文字バトルに参加して）

---

新居探しの人囲み、日く付きの部屋の話で盛り上がる。

こんな日は、確かめに来てしまう。

大切な思い出詰まった2DK。

あのこのお通夜をした場所。

見上げると、灯り点る窓、幸せな家族の気配がした。

## 2DKの思い出(100文字で描き切れなかったこと)

---

玄関ドアを開けて 大股で5歩、いや3歩で家の隅まで行けたかもしれない。

横長の間取りの2DKは、それでも新婚の私にとっては「夢のお城」だった。

一人暮らしをしたことがなかったので 一から揃える家具家電。

部屋のつくりに合わせて 簡易なものばかりだったが

「新生活フェア」と銘打った 大型電気店のディスプレイみたいな

そんな、部屋だった。

長女が生まれ、「あのこ」が生まれ

「あのこ」が旅立って行った。

短いけれど、平穏な日々だった。

-----  
「あの部屋ね、ずっと借り手ないのかな。雨戸のシャッター閉まったままで」

引っ越した後、久し振りに会った友人が言う。

道に面したその部屋には 大きなシャッター式の雨戸があり とても目立つ。

彼女に微塵も悪気がないのは解っていたが

ぐさりと きたのだ。

何にぐさりと きたか その時は自分でよく解らなかったけれどもね。

時がたつ。場所が変わる。知り合いも変わる。

今更 過去に何があったか逐一話す相手もそういない。

普通に会話に入る時

自分にとっては思うこと沢山ある話題でも ついつい何の関係もないようにふるまっている自分がいる。

一緒にふざけて 混ぜって笑っている自分がいる。

タイムスリップしたような一角の 向いの表具屋さんの老夫婦

隣の駄菓子屋さん そして反対隣のおしゃべり好きな散髪屋のおばちゃん。

あそこにはあのころを 知っている人たちがまだ 普通に生活していて

その「部屋」を見ると たまに思い出すのかもしれない。

新たな入居者に、ぽろりと 言うこともあるかもしれない。

そんな時 どう思われるんだろうか。  
そう 思ってしまったのだ。

悲しい終わりであったけれど  
けして  
けして 悲しい部屋ではなかった。  
もちろん 気味の悪いことのある部屋にはなるはずもない。  
絶対にない。  
なんらの気配が たとえあったとしても それは  
恐れられるようなものでは 絶対にない。

実は まだ住んでいるときに いくつかの「不思議」には出会っている。  
フィクションに形を変えたけれど  
「大切な不思議」という 短編に置き換えた。(よろしかったら読んでください)

井戸のあった大きな家を潰して建てたハイツだと聞いていた。  
「気配」はあのこのではなく、もっと以前の何者か かもしれないなんてことも  
思ったりもするのである。

思ってみたり、否定してみたり  
気持ちは揺れる。

ともかく 新しい居住者が 部屋のこと気味悪がったりしないで  
幸せに暮らしてほしいと 願わないではいけないのだ。

## 仲良しの風景

---

朝 通勤の道で  
ばあちゃんがふたり  
こちらに向かって歩いてきた。

脇にたんぼの残る 細い道

ぶつからないよう  
ゆっくり 自転車を漕ぐ。

小柄な細い ばあちゃんと  
少しだけ 背の高い ふっくらしたばあちゃん

ふたりとも手に  
少しだけの古新聞を 紐できっちり束ねて  
大事そうに 抱えて持っている。

一か月分の新聞なら  
この量では 済まないだろうけど

自治会の資金に少しでも協力 なのか  
持てる分だけにして いろんな時、いろんなところで  
少しずつ片づけているのか

にこにこしながら  
二人並んで

新聞抱えて  
歩いて行くのだ。

仲良しの 風景。

いいな。  
こういうの。

## 桜の頃

---

繋いだ手が居心地悪そうだった。

沈黙は苦しかったけれど  
沈黙が破られるのも 怖かった。

「最近 一緒にいて 楽しい？」  
やっとの会話は そんな質問から始まった。

解ってる。  
解ってた。  
その日は そんな日だった。

何て 返事をしたか  
忘れた。

花見客でにぎわう公園で  
空は やわらかな 春の青。  
見上げれば 桜。  
ひらひらと 花びらも散って  
笑い声が響いていた。

どうやって その場から 戻ったか。

駅に向かうコンコースまで  
手をつないで

人ごみの中で  
手は離れた。

相手は振り向かず 少し離れても そのままで  
距離を置いて 歩いていた。  
いっそ 人ごみにまぎれて いなくなったら  
慌てて探してくれるのだろうか

そうも 思ったけれど  
自分から離れるのが 怖かった。

たいした 相手じゃない。  
本当の自分も見せてない。  
いつまでも 続く 恋じゃない。

そんな風に思いながらも  
「付き合う人がいる」のが 嬉しくて  
掛ってくる 電話を待つ時間さえ 楽しくて。

知ったかぶりで 傲慢で 本当は臆病で 語れるような経験なんて何もなかった女の子は  
知りあって 付き合っ て こんな日が来るまで  
それでも ずっと 幸せだったんだ。

帰りのひとりの電車の窓  
線路沿いの桜並木  
山も桜色に煙っていたのに  
ぽたぽた落ちる 涙を隠すのに  
下を向かなくちゃいけなかった。

何で こんな時期  
何で こんなお天気の日  
そう思った。

けど。

もうすっかり 昔話になってみて  
ありがとう と思う。

馬鹿でコドモの 恋の終わりを  
きれいな風景で 残してくれて。

良かったなって思う。  
桜が嫌いになるような 嫌な思い出にならなくて。

---

ずっとずっと若かった頃。  
桜の頃のほろ苦い思い出話。

## 桜の頃 その後

---

花びらが散って 葉桜になって  
夏の気配がしてくるころの話。

(本当は 別の「桜の頃」の話を 2にして書こうと思っていたのだけど それも また今度)

どうなったかって？  
別に誰も 聞きたくない...よね？

まあ、ありがちな 恋愛話。  
みっともなくって 情けなくて  
でも その時ばかりは それで精一杯で。  
ちょっと 過ぎた時は 振り返るのも恥ずかしく  
フタ閉めて 忘れたふりをする。

ずっとずっと 時が過ぎ  
今なら やっと フタ開けて  
ちらっとなら 自分でも観られる...かもしれない。

-----  
髪を切る。  
服装を替える。

失恋の儀式、というわけではない。

気分転換。自分の中のスイッチを切り替え。  
そして 堂々と 私の今をアピールしたくて。  
振られた私。さんざん泣いた私。  
へたくそな恋愛を振りかえり  
それでも丸ごと 過去の自分を愛しちゃってる 「私」がいる。

ダメ押しで手紙なんか書きちゃって  
「こんな子がどこかで生きていること たまーにでいいから 思い出してくれたら 嬉しいな」  
ありがとう 会えて良かった・・・なんて 今でもやっぱり 赤面ものの文面だったような気がする。

振られても 女の子はやっぱり「ヒロイン」。

勘違の ヒロイン。

手紙とどっちが先だったか 記憶はあやふやだ。

久しぶりに電話が掛り もう一回 会うことになった。

ショートカット、

カラージーンズに チェックのパーカー。

彼の知らない女の子みたいになっていたのに

そのままの格好で

それでも 嬉しさ隠せず会いに行った...んだったと思う。

どう接したらいいか お互い解らないまま

初夏の風の吹く ファッションビルの 前

待ち合わせの人や 寄り添って座ってるだけのカップルの憩う

れんが造りの 階段で

トントン 私は 彼の前を

軽口叩きながら

飛び跳ねるように 歩いた。

すっかり違う外見になって

元気そうに「前」に行く私を見て

ああ、終わったんだなあ... と 彼は彼で 思ったそうさ。

最後の最後のさよならの前に

どんな顔して言ったかは もう思い出せないけれど

彼は 私にそう言ったんだ。

昔の昔の

そう、すっかり もう、昔のはなし

ぺんぺん草花束にして

<http://p.booklog.jp/book/29060>

著者：すずはら なずな

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nazunasuzuhara/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29060>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29060>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.